



Data

監督: マルガレーテ・フォン・トロッタ

出演: イングリッド・ボルゾ・ベルダル / カーチャ・リーマン / ハルク・ビルギナー / ティンカ・フュルスト / フレドリック・ワーゲナー

■■■ショートコメント■■■

◆ 都市問題をライフワークとしている弁護士の私にとって、都市問題や住宅問題をテーマにした映画は、「シリアスもの」でも「コメディもの」でも必見。したがって、邦題が『ニューヨーク最高の訳あり物件』とされた本作は必見。

私が住んでいる最上階のマンションも200㎡はあるから相当広いが、モデルを卒業し、今はファッションデザイナーとしてデビューしようとしている美女ジェイド（イングリッド・ボルゾ・ベルダル）が住んでいるニューヨーク・マンハッタンの超高級アパートメントの広さと豪華さは、それとはまったく比較にならないもの。ところがジェイドはある日突然、スポンサーでもある夫のニック（ハルク・ビルギナー）から離婚を告げられたから大ショック。さらにそこに前妻のマリア（カーチャ・リーマン）が転がり込み、ニックとの契約で家の所有権の半分は自分のものだと言主張し、奇妙な同居生活が始まったから、アレレ・・・。

同作のチラシには、「マンハッタンの最高級アパートメントに同じ夫に捨てられた元妻ふたり。火花を散らす彼女たちのおかしな共同生活が始まる——！」と書かれていたが、なるほど、そういうこと・・・。

◆ 前妻のマリアは40歳の時にニックと離婚し、故郷のドイツで暮らしていたが、ファッションデザイナーとして成功しようとしているジェイドは、元モデルだけあってかなりの美女。そんな美女を登場させてニューヨーク・マンハッタンを舞台とし、最高級アパートメントをめぐる元妻と火花を散らすコメディ劇となれば、誰でもあのウッディ・アレン監督を思い浮かべるはず。ところが、何と本作の監督は、あの名作『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマ32』215頁）のマルガレーテ・フォン・トロッタ監督と聞いてビックリ。1942年生まれのドイツを代表する社会派映像作家として敬愛されてきたトロッタ監督が、ウッディ・アレンばりの初のコメディに挑戦したわけだ。

しかし、キネマ旬報7月上旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」でも、3人の

映画評論家の採点は星2つ、2つ、3つと低いうえ、『ハンナ・アーレント』で健在ぶりを示したM・フォン・トロッタが、偉大な先達に倣ってNY流喜劇に挑んだものの、最高度の熟達と洗練が必要とされるこの分野に手を出すには、この監督は生真面目に過ぎる」 「このコメディ、ただちにルビッチ、ワイルダー、N・サイモンの名が浮かぶ。これを『ハンナ・アーレント』の監督が手がけた。やはり少し重い。」と酷評されている。私の評価も、残念ながらそれと同じだ。そもそも2人の女の争いの中で、部屋に飾っている大きな絵を何回移動させれば気が済むの？また、大切に飾っているお皿は割ってしまったらおしまい、それを修復して再度飾るなんてことがホントにできるの？その他、女同士の罵り合いにも軽やかさを感じることができず、むしろギスギス感の方が・・・。

◆ 本作前半は、夫のニックから既に捨てられた女マリアと、今まさに捨てられようとしている女ジェイドの不動産の居住と売却をめぐる争いが描かれる。また、後半からはそこにマリアの娘アントーニア（ティンカ・フェルスト）も加わり、三つ巴のバトル（？）になるが、この脚本もあまりいただけない。マリアが援軍を呼ぶかのようにしてアパートメントに転がり込んできたのが、アントーニアとその小さい一人息子だが、アントーニアがつけている自家製の香水にジェイドが惹かれたところから、急遽後半のストーリーが展開していく。つまり、ジェイドのブランドにアントーニアの香水を加えることで、一見ジェイドは商売も、対マリア戦も有利に進めることができるようになったのだが、さてその展開と結末は・・・？ここらあたりが、ニューヨーク流とジャーマン流の違うところで、観ていて面白いが、だからどうだっというの・・・？

本作のような“女のバトル”に焦点を当てた映画では、男の存在感が薄いのは当然だが、ちょっといい男風の老人ニックが、ジェイドを捨てて10代の女の子に熱をあげているという設定もいかにも軽薄。また、実にくだらないことで、その女の子と切れた後、再度ジェイドに「ヨリを戻そう」と言うニックの姿もあまりに現実味がないから、バカバカしくなってくる。したがって本作は、総体として脚本がイマイチ・・・。

◆ 私は2019年4月に“法廷モノ”名作映画から学ぶ生きた法律と裁判を出版したが、それは総論だけ。したがって、次の企画としては「各論」を予定しているから、本作は離婚に伴う財産分与、慰謝料請求のテーマにピッタリ。そう考えていたが、『ハンナ・アーレント』であれほど法律上の論点を煮詰めたトロッタ監督とは思えないほど、本作の法的論点の整理は杜撰だ。ジェイドが前妻のマリアからニックを奪うように結婚したのは10年前だから、誰が考えてもその時点でニックとマリアとの間で離婚に伴う財産分与と慰謝料の処理は終わっているはずだ。それなのに、なぜ今になってマリアは、マンハッタン最高級アパートメントの所有権の半分は自分のものだと言主張するの？他方、ジェイドも所有権が半分しかないことを認めたうえで売却することでOKなら、値段が多少下がることを我慢すれば、自分の持ち分を売却するのは法的に簡単はず。そして、そうなれば前半のわかったようなわからないような同じ夫に捨てられた元妻2人のバトルもないはずだ。本作では「裁判をしたくないから・・・」という言葉が弁解がましく出てくるが、スクリー

ン上で観るようなバカげたバトルをやるのなら、さっさと法的に売却手続きを進める方がよほど気が利いているはずだ。そんな風に思いながら観ていると、ますます本作が映画としてつまらないものに・・・。

2019（令和元）年7月23日記